（『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第 7 号 2022. 3. 31）

研究ノート

日本語中級レベルにおいて学ぶべきディスカッション技術
−「質問する」「同意する」「反論する」を例に−

香月　裕介、福原　香織[1]

キーワード：討論、ディスカッション、JF スタンダード、授業デザイン

1. 問題の所在

日本の大学で学び、日本の企業に就職する留学生にとって、ディスカッションの技術、とりわけ合意形成や意思決定のプロセスをも含む討論の技術[2]を日本語で身につけることは、大学の授業、インターンシップ、就職活動、卒業後の就労において必要不可欠なものである。討論においては、そのテーマと目的を深く理解し論点を整理しながら、他の参加者の意見に反応し、自分の意見とも関連付け、なおかつそれらを言語化し、結論に至らなければならない。討論がこのように複雑な言語行動の場であることを考えれば、討論には単なる日本語会話能力だけでは対応しきれないことが要求されていることが分かる。いわゆる「会話能力」と「討論ができる能力」は別の能力として捉えるべきものである。

それにもかかわらず、これまでの日本語教育では、討論技術は「会話・談話」の延長上に位置づけられ、大学で学ぶ留学生に相応しい「討論を進める・議論を深める技術と能力」「討論に必要な日本語表現」の涵養に必要な実践的学習方法および授業デザインが講じられてこなかった。これらの討論技術に特化して学ぶことを目的にした留学生向けのテキストは皆無であることからもその事実が窺える。実際に、大学で日本語上級レベル[3]の留学生が討論やプレゼンテーションを行う際には、日本人大学生向けのスタディ・スキルテキストが使用されることは珍しくない。そして、そのような場合には、教師側が扱う部分を留学生に合わせて取捨選択し、時に補足もしながら使用せざるを得ないというのが現状である。

もちろん、タスクの一つとして討論を取り入れている留学生向けのテキストは、主に上級レベルにおいて多く見られる。しかし、それらは「討論ができること」を前提としたデザインになっている。つまり、そもそも討論とはどのようなものか、論理的であるとはどういうことか、自らの考えをどのように表現すれば適切なのか、といったことは「あたりまえに分かっている、できる」ものとして討論のタスクが組み込まれているのである。上級学習者はこうした討論に必要な技術を身につける機会がほとんど無いまま、ほぼ自力で討論に臨んでいるのが現状である。

一方で、その前提段階が難しい、分からないと感じる留学生は決して少なくない。上級レベルの時点で討論ができることを前提とするのであれば、中級レベル[4]の段階から徐々に討論の意義と目的を認識させ、必要な言語表現・非言語表現を併せて段階的かつ体系的に学ぶ

こと、経験を積んでいくことが不可欠である。学習者自身が、具体的な方略を立てられるようになるための授業デザインが求められる。

2. 本研究の射程：「討論」と「ディスカッション」

上級レベルで討論ができるようになることを目指して中級レベルから段階的かつ体系的に学んでいくためには、まず上級レベルで求められる討論技術を明確にすることが必要である。上級レベルで求められる技術が明確になれば、それはそのまま中級レベルにおいて学ぶべき技術となり、それを身につけるための授業デザインを検討していくことが可能になる(5)。上級レベルで求められる討論技術をまとめたものには福原（2019）があるため、本研究ではこれを参照する。そして、福原（2019）を土台にして、中級レベルで学ぶべき討論およびディスカッションの技術を具体的に検討していく。

ここで、本研究における「討論」「ディスカッション」という用語について整理し、「ディベート」と比較した上で本研究の射程を示す。

本研究で用いる「討論」という語は、「一定のテーマを巡っての合意・意思決定や説得を目的とする大学での学生同士の議論を特に想定」（福原 2019, p.45）したものとして用いている。一方で、「ディスカッション」は、先に説明した討論の意味を包含しつつも、あるテーマについての意見交換やアイディアの共有といった必ずしも合意形成や説得を求めない話し合いをもその範疇に入る語として用いている。

なお、「討論」「ディスカッション」と似た用語に「ディベート」があるが、ディベートは話し手があるテーマの是非について固定的な立場に立つ点、対立する立場の相手と議論を行って勝敗を決するという点、決まった順序にしたがって双方が順番に論述を行うためやりとりの自由度が低い点などから、本研究の捉える討論およびディスカッションとは指すものが異なる。本研究で検討する「討論」および「ディスカッション」は、大学の授業内での議論、そして卒業後の就労における会議といった場面での不可欠な技術として捉えている。こうした場面で求められるのは、自分の考えを押し通すことでもなければ、議論の相手との勝ち負けを決めることでもない。決められた順番のとおりに意見や反論を述べていくわけでもない。必要なのは、相手の意見との相違を共有し、すり合わせ、落としどころとしての合意形成を目指すこと、あるいは真摯に相手を説得して納得してもらうことである。そして、これらの双方の発話のターンテイキングは、主体的にかつ適切に行われなければならない。

以上の議論をまとめたものが〔表 1〕である。本研究では、「討論」「ディスカッション」のみを検討の対象とし、「ディベート」は対象として扱わない。

表 1　本研究で使用する用語の整理と本研究の射程

用語	特徴	
討論	合意形成、意思決定、説得などにより妥当な結論を導くことを目的とした議論を指す	本研究の射程
ディスカッション	「討論」が指すものに加えて、意見交換やアイディアの共有といった結論を求めない話し合いも含む	本研究の射程
ディベート	対立する立場にある者同士が順に意見や反論を述べ、勝敗を決することを目的とした議論を指す	

以上、本研究において「討論」「ディスカッション」という用語が意味する範疇について述べた。すでに述べたように、「ディスカッション」は「討論」をも包括するより大きな概念である。したがって、討論、すなわち合意形成や説得のための議論の技術を身につける前提には、ブレインストーミングとして意見を出し合う、出た意見を整理して発表するといったディスカッションに相当する技術があると言える。

そこで、中級レベルで学ぶべき技術の明確化を目指す本研究においては、討論の技術に限らず、その前段階であるディスカッションの技術にも視野を広げ、検討を進めていく。

3. 上級レベルで求められる討論技術：福原（2019）を参考にして

本節では、上級レベルで求められる討論技術について整理し、中級レベルで学ぶべき事項を検討するための布石としたい。1 節でもすでに指摘したように、会話能力が高い上級、さらにはそれ以上のレベルの学習者であっても、討論の場では十分に能力を発揮できないことが少なくない。これは、個人の会話能力やプレゼンテーション能力の高さが、討論技術に直結するわけではないことを示している。では、どのような能力・技術が上級の討論では求められるのか。JF スタンダード(6)における B1、B2、そして C1 の該当部分（「CEFR Can-do 一覧　カテゴリーごと」の「方略 Can-do」のうち、「発言権を取る」「議論の展開に協力する」など討論に関するカテゴリーの部分）から、熟達度の記述を抜き出してみると〔表 2〕のようになる。（詳細は福原（2019）を見られたい。）

なお、B1 は中級（前半）相当とされるが、討論に関するカテゴリーにおいて「出来ること」を見ていくと、上級にも該当すると思われる部分がある。そもそも、CEFR およびそれを土台とした JF スタンダードのレベル設定は、厳密に初・中・上級の各レベルに対応するものではない。また、カテゴリーごとの「出来ること」の記述は、あくまでも目安であって、固定的なものではないと考える。したがってここでは、B1 の討論に関する記述も広く「上級で求められる討論技術」とみなし、考察の対象とした。

表 2　JF スタンダードにおける討論・ディスカッションに関する熟達度の記述

レベル	熟達度の記述
C1	・説得力をもって公式に主張を展開でき、質問やコメントに応じ、複雑な筋立ての対抗　　意見にも流暢に自然に適切に応えることができる。 ・巧みに自分の話を他の話し手の話に関連付けることができる。 ・自分の発言の前置きにふさわしい言い回しを適切に選び、発言の機会を獲得できる。 ・話の内容を考えている間も、発言権を維持できる
B2	・自分の意見を述べ、説明し、維持することができる。代案を評価し、仮説を立て、また他人が立てた仮説に対応できる。 ・相手の反応や意見、推論に対応して、フィードバックを与え、議論の進展に貢献できる。 ・自分の理解したことを確認したり、他の人の発言を誘ったりして、議論の進展に寄与できる。 ・適切な表現を使って議論に途中から入り込むことができる。 ・上手に発言権をとって会話を始め、続け、終えることができる。 ・手持ちの言い回し（例：「それは難しい問題ですね…」等）を使って、言うべきことを言葉にする間、時間を稼ぎ、発言権を保ち続けることができる
B1	・基本的な言葉や方略の中から持っているものを利用できる。 ・議論の中で合意点を要約し、話の焦点を整えることができる。 ・誰かが述べたことを部分的に繰り返して、互いの理解を確認し、計画通り話が展開するのに寄与できる。 ・他の人を話し合いに誘い入れることができる。 ・適切な言い回しを使って、馴染みのある話題についての議論に途中からでも加わることができる。

〔福原（2019）をもとに筆者作成〕

JF スタンダードは、一つの言語行動の熟達を段階別に記述しているため、〔表 2〕の記述には、レベル間で共通する部分が多い。これらを整理すると、上級レベルで求められる主要な技術は「①適切な表現・言い回しを使う」「②発言権をコントロールする」「③自分の話を他の話し手の話と関連付ける」「④議論の進展に貢献・寄与する」の 4 つであると言える。

この 4 つの技術は独立したものではなく、相互に関連するものである。「適切な表現・言い回しを使う」ことで、「発言権をコントロールする」ことが可能になる。そうして獲得した発言の機会においては、好き勝手に発言するのではなく、「自分の話を他の話し手の話と関連付ける」ことが求められる。話を関連付けることで発言が連鎖し、議論が発展していき、結果として「議論の進展に貢献・寄与する」ことになる。もちろん、話の関連付けや議論に寄与する発言に際しても、「適切な表現・言い回しを使う」ことが必要である。

「発言権をコントロールする」ことには、「発言権を獲得する／話を始める（C1、B2、B1）」、「発言権を維持する／話を続ける（C1、B2）」、「発言権を移行する／話を終える（B2、B1）」が含まれる。また、「自分の話を他の話し手の話と関連付ける」ことには、「誰

かが述べたことを部分的に繰り返す（B1）」が含まれる。さらに、「議論の進展に貢献・寄与する」ことには、「相手の意見や推論に反応してフィードバックを与える」（B2）、「合意点を要約し、話の焦点を整える」（B1）、「互いの理解を確認する」（B2）など多様な技術が含まれる。

以上を整理すると、次のようになる。

〈上級レベルで求められる討論の技術〉

①適切な表現・言い回しを使う

②発言権をコントロールする

②-A　発言権を獲得する／話を始める

②-B　発言権を維持する／話を続ける

②-C　発言権を移行する／話を終える

③自分の話を他の話し手の話と関連付ける

③-A　誰かが述べたことを部分的に繰り返す

④議論の進展に貢献・寄与する

④-A　相手の意見や推論に反応してフィードバックを与える

④-B　合意点を要約し、話の焦点を整える

④-C　互いの理解を確認する

本研究では、暫定的に、上記を「上級レベルで求められる討論の技術」とする。そして、これらの上級レベルで具えておかなければならない技術は、言い換えれば中級レベルから学び、身につけていくことが必要な技術となる。したがって、これらの技術を中級レベルから学び、身につけられるような授業デザインを検討していくことが本研究の課題となる。次節では、これらの技術を中級レベルに落とし込んで反映させた授業デザインの一例として、ディスカッションにおける「質問する」「同意する」「反論する」という 3 つの言語行動を取り上げる。

4. 中級レベルで学ぶべきディスカッション技術：「質問する」「同意する」「反論する」

本節では、「質問する」「同意する」「反論する」を例にして、3 節で示した討論の技術を反映させたディスカッションの授業デザイン(7)を示す。一つずつを見ていく前に、3 つともに共通して必要なことを整理しておく。

まず、「質問する」「同意する」「反論する」ことは、相手の発言を受けて自身が発言するものであるため、これらの言語行動自体が「④-A　相手の意見や推論に反応してフィードバックを与える」ことになる。

次に、こうしたフィードバックを適切に行うには、当然に「①適切な表現・言い回しを使

う」ことが求められる。そのため、適切な表現・言い回しを学ぶべき段階の中級レベルでは、定型的な表現・言い回しを用意しておき、それを使って質問、同意、反論を練習し、身につけていくのが望ましい。

さらに、表現・言い回しだけでなく、談話構成も整えておくと使いやすい。これらの3つの言語行動は、それぞれの該当表現の前に「前置き＋引用」を伴って発話するように指導することが重要である。前置き表現を適切に使うことによって、「②-A　発言権を獲得する／話を始める」ことが容易になり、突然の発話で「発言権を奪う」ような印象を与えずに済む。また、先の相手の発言を引用することには、「③自分の話を他の話し手の話と関連付ける」効果がある。引用するためには、「③-A　誰かが述べたことを部分的に繰り返す」必要があるが、引用は、相手の発言を理解できていなければうまくできない。そのため、「質問する」「同意する」「反論する」際に引用を伴うことは「④-C　互いの理解を確認する」ことにもつながる。引用を必ず発話させることによって、学習者自身が相手の先の発言を整理することが可能になり、結果としてそれまでの展開を無視した発言が出るのを極力抑えられるのである。

以上を踏まえたうえで、3つの言語行動について一つずつ見ていく。それぞれにおける適切な表現・言い回しの例も併せて提示する。

4.1 「質問する」

【前置き】

質問をする場合には、続く発話が質問であるということが明示されるような前置き表現を用いる。

・「すみません、ちょっと質問なんですが、／質問があります。」

・「すみません、ちょっとお聞きしたいんですが、／お聞きしたいことがあります。」

【引用】

直前の相手の発言に対して質問する際は「今」を用いる。一方で、2つ以上前の発言に対して質問する際は「先ほど／さっき」を用いるのがよい。また、その場合、誰の発言かを明確にするために名前を挙げる。

・「今、……とおっしゃいましたが、」

・「先ほど／さっき、〇〇さんが……とおっしゃいましたが、」

【質問】

質問のパターンは大きく3種類である。

(1) 詳しい説明を求める

・「～～について、詳しく教えてくれませんか。」

答える場合：文章で説明する

(2) 具体例を求める

・「〜〜とは、例えばどんな○○ですか。」

答える場合：例（単語）を挙げる

(3) 言い換えて確認する

・「〜〜とは、・・・・ということですか。」

答える場合：はい／いいえ

(3) の質問によって、「④-C　互いの理解を確認する」ことが可能になり、互いの理解が異なる場合は、(1) や (2) に則って質問と応答をやり取りすることで理解をすり合わせていくことになる。

4.2 「同意する」

単純に同意を示すのみであり、それ以上議論の発展に貢献する発話をしないのであれば、「そうですね。」「なるほど。」「確かに。」といった同意を示すあいづちだけで反応することも可能であるが、ここでは、同意に加えてさらに意見を積み重ねたり、議論を進めたりする場合を取り上げる。

【前置き】

同意の場合は、引用とは異なり、前置き段階でその発話意図を示す必要はなく、発言権を獲得することだけを目的とした前置き表現を用いる。あるいは、上記のような同意を示すあいづちを適切なタイミングで発すれば、発言権を得ることができる。

・「すみません、ちょっといいですか。」

・「ちょっと思ったんですが、」

【引用】

引用のやり方は、質問するときと同様である。

・「今、……とおっしゃいましたが、」

・「先ほど／さっき、○○さんが……とおっしゃいましたが、」

【同意】

同意のパターンは大きく 2 種類である。

(1) 別の例を挙げるなどして、意見を補強する

・「〜〜の場合も、同じだと思います。／同じことが言えますね。」

・「〜〜にも当てはまると思います。／当てはまりますね。」

(2) 先の発言の焦点となる部分を抜き出して提示する

・「確かに、〜〜ですね。」

・「私も、〜〜が大切だと思います。」

(2) の発言において「焦点となる部分を抜き出す」ことは、相手の発言の趣旨をよく理解した上で要約し、自分の言葉で紡ぎださなければならないため、中級レベルとはいえ比較的

高度な言語能力が求められる。しかし、この発話が適切になされれば、「④-B　合意点を要約し、話の焦点を整える」上で重要な役割を果たす。

4.3 「反論する」

反論は、それ自体が相手と対立するものであり、3 つの言語行動の中で最も「①適切な表現・言い回しを使う」ことが求められるものだと言える。単純に不同意を示すのみであり、それ以上議論の発展に貢献する発話をしないのであれば、「うーん。」「そうでしょうか。」「そうですねえ…。」といった不同意を示すあいづちだけで反応することも可能であるが、不同意の場合には、それ以上の発話を行い、議論の進展に貢献するほうが討論やディスカッションにおいては望ましいだろう。

【前置き】

前置きは、同意するときと同様に発言権を獲得することだけを目的とした前置き表現を用いる。あるいは、上記のような不同意を示すあいづちを適切なタイミングで発すれば、発言権を得ることができる。

・「すみません、ちょっといいですか。」

・「ちょっと思ったんですが、」

【引用】

引用のやり方は、質問するとき、同意するときと同様である。

・「今、……とおっしゃいましたが、」

・「先ほど／さっき、〇〇さんが……とおっしゃいましたが、」

【反論】

反論のパターンは大きく 2 種類である。

(1) 例外を挙げるなどして、反論する

・「必ずしもそうとは言えないのではないでしょうか。／と思います。」

・「～～には当てはまらないのではないでしょうか。／と思います。」

(2) 先の発言に論理的な矛盾や齟齬があることを指摘する

・「～～からと言って、……とはかぎらないのではないでしょうか。／と思います。」

・「その話は、論点からずれているのではないでしょうか。／と思います。」

反論の表現パターン例の一つとしてここでは「のではないでしょうか」を挙げているが、これは下降調のイントネーションをよく練習することが必要な表現である。また、反論は、ともすると「重箱の隅をつつく」「水掛け論になる」ことになりかねない。「④議論の進展に貢献・寄与する」反論とはどのようなものかということを、練習を通して身につけていくことが求められる。

5. まとめ

以上、「質問する」「同意する」「反論する」という 3 つの言語行動を例に、中級レベルでどのように討論・ディスカッションの技術を身につけていくかを示した。適切な表現・言い回しを使うことができたとしても、的確かつ適切な同意や反論をすることは、はじめのうちは難しいだろうと思われる。段階的に学んでいくためには、中級レベルでは身近で考えやすいテーマを設定して討論・ディスカッションを行うことがいいだろう。たとえば、次のようなものが考えられる。

- 選択型（あらかじめ提示された複数の選択肢の中から最良のものを選ぶタイプ）
  「自分の子どもに習わせるなら、ピアノ、習字、パソコン、水泳、英語の中でどれか」
- 選択型（自分たちで選択肢を想定し、最良のものを選ぶタイプ）
  「大学生が一人暮らしの部屋を借りるときに、もっとも重視すべきことは何か」
- 賛否両論型(8)
  「都会と田舎、住むならどちらがいいか」
- 問題解決型(9)
  「日本人の友達をたくさん作るにはどうすればいいか」

実際のディスカッション・討論の実現には、「質問する」「同意する」「反論する」以外にも、「論点を確認する」「意見の変化を表明する」「時間をコントロールする」「相手に発言を求める」「ここまでの議論の内容を整理する」「議論した内容を共有する」など様々な言語行動が必要となってくる。また、あいづち、アイコンタクト、メモ取り、姿勢といった非言語行動の指導も不可欠である。これらの詳細な検討・整理については、今後の課題としたい。

〔注〕

(1) 本稿の執筆は、香月が 2・4・5 節、福原が 1・3 節を担当した。

(2) ここで言う「討論の技術」とは、「あるテーマについて複数の人間が意見を交わす場において、活発かつ円滑に議論を進め、深め、妥当な結論に導くために貢献する言語的・非言語的能力」（福原, 2019, p.46）を指す。

(3) 本研究で言う「上級レベル」は、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment）の示す B2 レベル以上を想定している。

(4) 本研究で言う「中級レベル」は、CEFR の示す B1 レベル程度を想定している。

(5) 中級段階と上級段階の間に中上級段階（B1～B2 にまたがる段階）を設定して、それぞれに検討を進めていくと、より段階的で体系的な学習が可能になると思われる。中上級を想定した上での学習項目のより詳細な検討は、今後の課題としたい。

(6) JF スタンダードとは CEFR の理念に基づき、国際交流基金が 2010 年に「JF 日本語教育スタンダード」（JF スタンダード）として開発・公開した、日本語の熟達度の目安を示したガイドラインである。CEFR は、多文化社会を形成する欧州において考案された言語教育に対する理念の枠組みで、「その言語で何ができるのか」（Can do）を記述する。

⑺　この授業デザインは、神戸学院大学の日本語科目の一つ、「日本語会話Ⅲ」において実施しているものである。香月は 2016 年から 2020 年まで、福原は 2018 年と 2019 年にこの科目を担当し、中級レベルのディスカッションを指導した。

⑻「賛否両論型」という名称は、工藤・大津（2018）を参考にしている。「賛否両論型」とは、「あるテーマについて賛成か反対か、理由とともに各自の意見を述べ合うもので、そのテーマについて複数の視点から多面的・複眼的に考え、自身の考えを相対化することを目的としている」（工藤・大津，2018, p.53）タイプの討論である。

⑼「問題解決型」という名称も、工藤・大津（2018）に拠った。「問題解決型」とは、「設定された問題状況を解決するために、与えられた条件や状況設定のもと、具体的かつ現実的な解決策を複数、提案することを目的とした」（工藤・大津，2018, p.54）タイプの討論である。

〔参考文献〕

工藤嘉名子・大津友美（2018）「異なるディスカッション課題における日本語学習者間のやりとりの比較－賛否両論型と問題解決型のディスカッションの場合－」『日本語・日本学研究』第 8 号　東京外国語大学国際日本研究センター　pp.51-65.

福原香織（2019）「日本語上級レベルの討論技術とは－CEFR ガイドラインに照らして－」『神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要』第 4 号　神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会　pp.45-61.

【参考 URL】

国際交流基金「JF 日本語教育スタンダード」
https : //jfstandard.jp/top/ja/render.do（2021 年 9 月 20 日アクセス）

国際交流基金「JF スタンダード CFER Can-do リスト」（レベルごと、カテゴリーごと）
https : //jfstandard.jp/pdf/CEFR_Cando_Level_list/pdf（2021 年 9 月 20 日アクセス）